「戦争」が残した自然

函館市のシンボル・函館山（334メートル）。毎年、多くの観光客が夜景を見るためにロープウェーや観光道路で山頂の展望台を訪れる。しかし、この山の価値は華やかな夜景だけでない。観光客に気づかれずに木々の中に朽ちている無骨な軍事要塞（ようさい）があるからこそ「函館山と砲台跡」として北海道遺産に指定された。山頂部から海沿いまで、約50カ所のやぶの中に司令所や砲台などの跡が眠っている。

「函館要塞」は、1898（明治31）年から4年の歳月を費やして築造された。ロシアとの衝突が予測される中で、国内最大の造船所のある函館港と、太平洋への重要航路だった津軽海峡を守る絶好の位置にこの山はあった。

要塞に、日露戦争（1904～05年）で日本陸軍が激戦地の旅順要塞の203高地で使用した強力な28インチ榴（りゅう）弾砲（だんほう）を16門配備した。「軍艦は要塞に勝てない」のが、当時の軍事上の常識。函館要塞の近くには日露戦争の際、ロシア海軍は寄り付かなかったという。

日露戦争当時は800人の兵士がいたというこの要塞も、設備の老朽化による訓練要塞への転用を経て、一度も実戦を経験することなく45年、太平洋戦争の終戦を迎えた。砲台の台座などの金属部品はすべて撤去され、今に残るのは、コンクリートやれんがの壁や床だけだ。

戦争の暗いイメージを漂わせる要塞だが、思わぬ副産物をもたらした。軍事機密を守るために1899年施行された要塞地帯法で、函館山の立ち入りと写真撮影が戦後の46年まで禁止された。おかげで30万都市のただ中にある山に、ほぼ手付かずの自然が残されることになった。植物は約600種、野鳥は約150種の多彩さを誇るこの山は62年、鳥獣保護区特別保護地区に指定された。

Data

標高約334mの函館山は海中から噴出した火山で、牛が寝ているような姿から臥牛山とも呼ばれる。1899年から1945年まで要塞として使われ、一般市民の立入りは規制されていたが、1946年に一般に開放された。現在の山頂展望台は1988年に完成し、1962年には鳥獣保護区特別保護地区に指定されている。

●お問合せ先
函館市土木部緑化推進課
Tel.0138-21-3430